児島弘一郎先生の思い出

清　水　善　和
（総合教育研究部長）

毎年、4 月 1 日に駒澤大学に新しく着任される先生方の就任式が開催される。学部長等は所属学部の新任教員が理事長から辞令を受け取る際に、その場で起立して見守ることになっている。児島弘一郎先生は、私が 2007 年 4 月に総合教育研究部の部長に就任して、初めてお迎えした新任教員のお一人だった。式の後で声を掛けた際の印象は、大変真面目そうな方だなというものだった。

2008 年 11 月に、教授会で 2009 年度からの各種委員の選挙があり、児島先生が学生部委員に選出された。学生部委員は各種委員の中でも重みのある委員なので、就任 2 年目の児島先生が選出されたのは少し意外でもあり、また、就任早々で負担の大きい委員になっていただくのは気の毒な気もした。2009 年度に入ってからは教授会で学生部委員会の報告をしていただいた。毎回、事前に配布資料の文案をメールで送って下さり添削を求められたが、簡潔にして要領を得た内容はほとんど手を加える必要がなかった。また、メールに添えられた文章もたいへん丁寧できちんとしており、誠実なお人柄がにじみ出たものであった。ふだんあまり目にしないような言い回しや熟語が使われていて、さすがは中国語の専門家だと感心したこともあった。

2009 年 10 月に、ご著書『教養のための中国古典文学史』が出版され、思いがけず私も寄贈を受けた。若いのにたいへん精力的に活動されているのだなと頼もしく思った次第である。また、本に添えられた手紙には、「普段接している学生諸君の顔を思い浮かべながらの執筆は、論文を書くのとはまた異なる愉しい営為でもありました」とあり、日々の授業にも力を注がれている様子が推察できた。

最後にお会いしたのは、亡くなられる 1 週間ほど前に研究館 2 階の廊下で

すれ違ったときだった。ちょうど拙著が出版されたので、先の献本のお返しにと郵便受けに入れておいた旨を伝えると「そうですか」と返事をされたが、今にして思うと少し元気がなかったような気がする。そんなわけで、1週間後に先生が亡くなったと伝えられたときには、にわかには信じることができず、斎場で先生の遺影を見てやっと事実として受け止めることができた。しかし、部長職にある身としていまだ「なぜ」という痛恨の思いは去らない。

いただいた著書はまだほとんど読めていないが、児島先生の生前の誠実なお人柄を思い出しながら、これからじっくりと読ませていただくつもりである。故人のご冥福をお祈りします。